

高大接続科目としての英語授業 －中部大学と春日丘高校の事例から－

加藤由崇

Teaching English as a “High School–University Articulation” Subject: The Case of Chubu University and Haruhigaoka High School

Yoshitaka KATO

This paper reports on the practice of teaching English as a “high school–university articulation (*kodai-setsuzoku*)” subject. The author, a teacher-researcher of English education at Chubu University, was in charge of the first two years of this project and taught 17 (in 2017) and 26 (in 2018) students from Haruhigaoka High School, an affiliated school of Chubu University. By summarizing the purpose and outcome of the project, this paper intends to contribute to consistent improvement of the joint program.

キーワード：英語、高大接続、中部大学、春日丘高校

Keywords: English, high school–university articulation, Chubu University, Haruhigaoka High School

1. 背景・現状

本稿では、2017 年度から始まった中部大学と春日丘高校の高大接続科目としての「資格英語 A（英検）」「資格英語 B（TOEIC）」の授業に関する実践報告を行う。2017 年度と 2018 年度の 2 年間授業を担当した者として、筆者が考える高大接続科目の利点と課題をまとめる。

1.1 高大接続とは

2016 年 3 月に公表された『高大接続システム改革会議「最終報告」』には、高大接続の目的に関して以下のような記述がある（文部科学省，2016）。

高大接続システム改革は、高等学校教育改革、大学教育改革、及び大学入学者選抜改革をシステムとして、一貫した理念の下、一体的に行う改革である。一人一人が、「学力の 3 要素」を基盤に、自分に自信を持ち、多様な他者とともにこれからの時代を新たに創造していく力を持つことができるよう、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜全体の在り方を転換していかなければならない。（p. 7）

「学力の3要素」とは、①知識・技能の確実な習得、②思考力・判断力・表現力、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を指している。本来、高等学校（以下、高校）ではこうしたバランスの良い学力伸長を目指した授業が行われるべきだが、現状では「より偏差値の高い大学」に入学することを目的とした高校生が試験問題の演習に時間を費やし、その結果、大学進学後に学びの目的を見失うという事例が少なくない。人工知能やIoT（モノのインターネット）などの技術の台頭によって、求められる人材や学力の在り方が変化する中、高校と大学はともに教育の質的転換を求められている。高大接続の背景には、両者のマッチングを進め、高大を通して一貫した人材育成に取り組むべき社会背景があると思われる。

高等学校と大学の連携方法は様々であるが、教育面での具体例としては以下のような取り組みがある（文部科学省, 2014; リクルート進学総研, 2017 ほか）。

1. 高校生が大学の正規授業に参加
2. 大学教員が高校で講義（出前講義）
3. 大学で高校生向けの特別講座を実施
4. 大学の授業を高校にネット配信
5. オープンキャンパス

このうち、本稿では「1. 高校生が大学の正規授業に参加」に焦点を当てる。文部科学省のデータによれば、2013 年度（平成 24 年度）の時点で「高校生を対象とした、大学の通常授業の履修」を実施している大学数は 199（国立 35, 公立 14, 私立 150）であった。それらのうち、高校生による大学入学以前の単位修得を認めている大学は 79（学生数 2,089 名）あった（文部科学省, 2014）。

中部大学も、2017 年度から、春学期は「資格英語 A（英検）」「世界の歴史と日本」「生活環境と人間」、秋学期は「資格英語 B（TOEIC）」「日本語スキル A」「持続学のすすめ」の 6 科目における高大接続授業を実施している。本稿では、資格英語の授業から見た高大接続の利点と課題を述べる。

1.2 英語科の高大接続授業

では、具体的に英語授業の文脈について述べる。本授業では、大学の通常授業と同様、基本的には「90 分授業×15 回」を想定した授業が行われ、高校生は「大学生と同じ」授業を受けることになっている。通常の大学の授業と異なる点としては、主に以下の 2 点が挙げられる。

(1) 高大接続科目独自の授業日程

1 点目に関しては、大学教員に柔軟な対応が求められる点である。例えば、中部大学が

学期中の祝日に授業を行うことが多いのに対して、春日丘高校は基本的に授業がない。また、大学の方が高校よりも学期の始まりが早いために、高大接続授業の開始日が大学と比べてやや遅れる傾向にある。その結果として、授業終了週が大学の授業日程よりも遅れることがある。その他にも、高校の試験期間や三者懇談、あるいは部活動などの影響によって授業時間が前後することなどがあり、教員には柔軟な対応が求められる。

(2) 大学・高校教員によるティームティーチング

2点目は、この高大接続授業が高校と大学の両方の授業の単位付与科目であることが関係している。生徒は1つの授業を受けることで、高校と大学の単位を取得することができる一方で、大学・高校の教員には協働的な指導が求められる。しかし、それぞれ職場が異なる中、十分な打ち合わせの時間を確保することは難しい。現状では、大学教員が主導的に授業を進めながら、高校の教員が机間指導などのサポートに入るという形が通常である。

なお、2017、2018年度の授業の実施状況は、表1のとおりであった。初年度は受講生の数も限られていたが、次年度には9名が増加し、今後の受講状況の変化に注視が必要である。時間については、初年度の開講は月曜日で、いわゆる「ハッピーマンデー」の影響を受けることが多かったが、次年度は木曜日になり、ほぼ通常の大学の授業日程にしたがって授業を行うことができた。教室は、春日丘高校からの移動が比較的容易な25号館を使用した。

表1. 高大接続授業（英語科）の実施状況

	受講者数	時間	教室	単位数
2017年度	17	月曜日 5-6限	2542 (25号館4階)	1
2018年度	26	木曜日 5-6限	2533 (25号館3階)	1

2. 指導と評価

それでは、春学期の「資格英語 A（英検）」と秋学期の「資格英語 B（TOEIC）」の具体的な指導内容と資格試験の結果について述べる。

2.1 資格英語 A（英検）

2.1.1 指導内容

使用した教科書は、中部大学の同科目で使用している『英検2級マスターコース』（金星堂）と『英検2級でる順パス単』（旺文社）であった。2018年度の場合、以下の授業スケジュールに沿って15回の授業を行った（表2）。なお、成績評価は「英検」「単語テスト」「提出物」「Interview Test」の結果に加え、日頃の出席状況や授業態度等を加味して判

断した。

表2. 「資格英語 A (英検)」の授業スケジュール (2018 年度)

Day		Content	Vocabulary Test	
1	4/12	Introduction, Mini-test		
2	4/19	Lesson 1, 英検概説	単語 1-98	(pp. 10-20)
3	4/26	Lesson 2, Writing	単語 99-202	(pp. 21-32)
(5/3) (憲法記念日)				
4	5/10	Lesson 3-4, 長文	単語 203-301	(pp. 33-43)
5	5/17	Lesson 5, Listening	単語 302-405	(pp. 44-55)
6	5/24	Lesson 6-7	Review: 1-202	(pp. 10-32)
7	5/31	模擬テスト	Review: 203-405	(pp. 33-55)
6/3 (日) 英検一次試験				
8	6/7	Interview 1	熟語 1180-1263	(pp. 156-167)
9	6/14	Interview 2	熟語 1264-1347	(pp. 168-179)
10	6/21	Interview 3	熟語 1348-1442	(pp. 180-193)
11	6/28	Interview 4	会話 1-118	(pp. 240-263)
7/1 (日) 英検二次試験				
12	7/5	Review 1, Speaking	Review: 1180-1347	(pp. 156-179)
13	7/12	Review 2, Speaking	Review: 1348-1442, 会話 1-118	(pp. 180-263)
14	7/19	Interview Test		
15	7/26			

この授業は英検の受験を前提とした授業であるため、すべての生徒が 6 月 3 日 (日) に実施された英検 2 級あるいは準 2 級を受験する必要があった。授業は主に英検 2 級の取得を前提とした内容であるが、習熟度によって準 2 級 (あるいは準 1 級) の受験も認めている。2018 年度の場合、受講生 26 名のうち、2 名が 2 級を受験、22 名が準 2 級を受験した (結果は後述)。なお、野球部の遠征のために 2 名は不受験とならざるを得ず、高校教員に依頼し、別日に過去問を使用した問題に解答させることで対応した。

実際の授業では、英検 2 級を意識して 4 技能バランスの良い指導を心がけた。一方で、6 月 3 日 (日) の英検一次試験以降は、面接対策を行いながら、「意味順」と呼ばれる英文法の指導を行うなど (Tajino, 2018)、英語の基礎力を確かめる指導も行った。また、7 月 1 日 (日) の二次試験後には、高校生自身に “What do you want for the next English class?” (どのような英語の授業を受けたいか) と問い (図 1 参照)、それらに基づくスピーキング活動などを行った。概して受講生は発想力が豊かであり、受講生同士の仲も良く、こ

うした活動には意欲的に取り組んでいた。

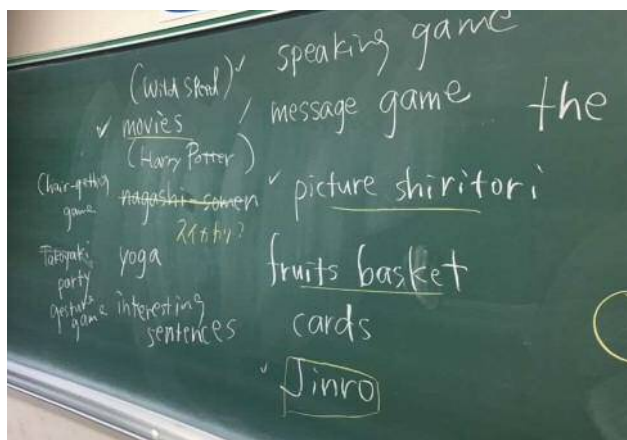


図1. 受講生が期待する授業の例

2.1.2 試験結果

では、2017、2018年度の英検の試験結果についてまとめる。原則全員受験としながらも、2017年度は4名が部活（野球・柔道）のため不受験、2018年度は2名が部活（野球）のため不受験であった。ほとんどの生徒は準2級を受験したが、2017年度は、17名中3名が2級と準2級のダブル受験をし、2018年度は先述の通り、26名中2名が準2級ではなく2級を受験した（この年はダブル受験はなし）。

以下の表3と図2に、英検準2級一次試験の結果（CSEスコア）を示す。CSEとはCommon Scale of Englishを指し、CEFRや他の資格試験（IELTSやTEAP）に対応した指標として2016年度から導入されている。

表3. 英検準2級一次試験の結果（CSEスコア）の記述統計

	2017年度 (N=13)				2018年度 (N=22)			
	R	L	W	合計	R	L	W	合計
平均	440.4	407.5	446.9	1294.8	432.4	413.2	421.2	1266.8
標準偏差	28.9	16.5	53.1	73.0	36.0	28.5	59.6	104.6
最高点	504	425	600	1488	506	469	515	1473
最低点	408	358	391	1157	368	361	250	996
中央値	434	411	435	1286	431	415	411	1268

注) R = reading, L = listening, W = writing, 準2級の合格基準スコアは1322、CSEスコアの解釈については以下のサイトを参照のこと (<https://www.eiken.or.jp/cse/>)。

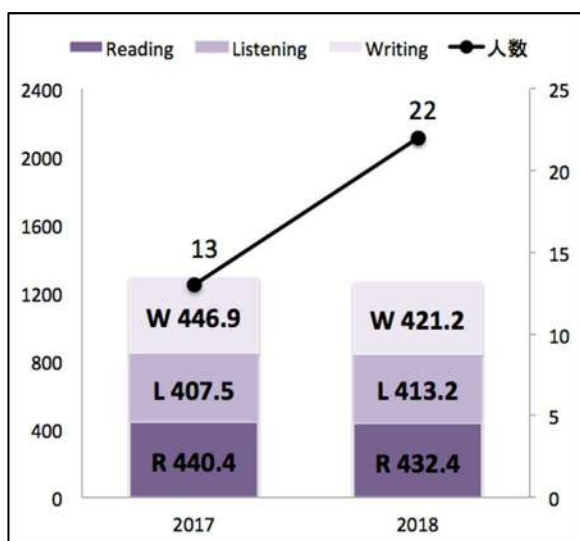


図 2. 英検準 2 級一次試験の結果 (CSE スコア) と受験者数の変化

2017 年度は、準 2 級一次試験合格者は 2 名であり、2018 年度は、2 級一次試験合格者が 1 名、準 2 級一次試験合格者は 6 名という結果だった。

2.2 資格英語 B (TOEIC)

2.2.1 指導内容

次に、秋学期に実施した「資格英語 B (TOEIC)」の授業について述べる。使用した教科書は、中部大学の同科目で使用している『TOEIC® L&R テストトレーニング (中級編)』(鶴見書店)と『基礎から学ぶ TOEIC®テスト英単語熟語』(南雲堂)であった。2018 年度は、以下の授業スケジュール (表 4) に沿って 15 回の授業を行った。なお、成績評価は「TOEIC® IP Test」「単語テスト」「授業タスク」「Poster Presentation」の結果に加え、日頃の出席状況や授業態度等を加味して判断した。

表 4. 「資格英語 B (TOEIC)」の授業スケジュール (2018 年度)

Day		Content	Vocabulary Test	
1	9/20	Orientation Mini-Test	【sample】 A1-8	pp. 10-17
2	9/27	Unit 1, Task	A9-16, A17-23	pp. 18-25, 26-32
3	10/4	Unit 2, Task	B1-5, B6-10	pp. 34-43, 44-53
4	10/11	Unit 3, Task	B11-16, B17-21	pp. 54-65, 66-75

5	10/18	Unit 4, Task	B22-26, B27-31	pp. 76-85, 86-95
6	10/25	Unit 5, Task	B32-36, B37-41	pp. 96-105, 106-115
7	11/1	Unit 6, Task	B42-46 会社組織～社内業務	pp. 116-125 pp. 186-196
8	11/8	Unit 7, Task	C1-3 社内経理～電話	pp. 126-131 pp. 196-205
9	11/15	Unit 8, Task	C4-7 郵便 etc.～産業 etc.	pp. 132-139 pp. 206-218
10	11/22	Unit 9, Task	C8-11 政治・社会～教育・研究	pp. 140-147 pp. 219-229
11	11/29	Unit 10, Task	C12-14 環境問題～旅行・交通手段	pp. 148-153 pp. 230-242
12	12/6	教科書模試(1)	C15-18 コンピュータ...～日常生活	pp. 154-161 pp. 243-249
13	12/13	教科書模試(2)	C19-22 その他	pp. 162-169 pp. 250-258
12/19 (Wed) 15:20~ TOEIC IP @Chubu University				
14	12/20	Poster Preparation		
(12/27) (冬休み)				
15	1/10	Poster Presentation		

春学期の英検は高校で申し込みを行うのに対して、秋学期の TOEIC は中部大学の団体受験 (TOEIC® IP Test) を受験するため、大学教員が申込金 (補助を受けて一人 3,000 円) を集める。成績算出の都合上、テストは毎年 12 月の中旬に実施されている (2018 年度の場合は 12/19)。高校生は、通常の高大接続授業とは別に、12 月に中部大学に来て TOEIC® IP Test を受けることになっている。

TOEIC® L&R テストは、本授業が対象とする高校生には難易度が高い。実際の授業では、単語テストと教科書を用いた演習を行いつつ、適宜基礎の確認と既習事項の復習を行いながら、無理のない授業展開を心がけた。なお、12 月 19 日の TOEIC® IP Test 受験後は、春学期と同様、学力の 3 要素を意識した柔軟な授業展開を試みた。具体的には、Exploratory Practice (探究的実践) と呼ばれる活動を行い、生徒自身の英語や英語学習に関する puzzle (疑問) を出発点として、i-Pad や書籍を用いてグループで調べ学習を行い、その成果についてポスター発表をするという形式をとった (詳しくは、Hanks (2017) を参照)。テストに向けた学習過程で湧いた疑問 (例: なぜ英語は「速く聞こえる」のか) や

もともと生徒自身がもっていた疑問（例：なぜ留学は効果的なのか）について、グループ内で議論を自主的に進めていた姿が印象的だった（図3）。

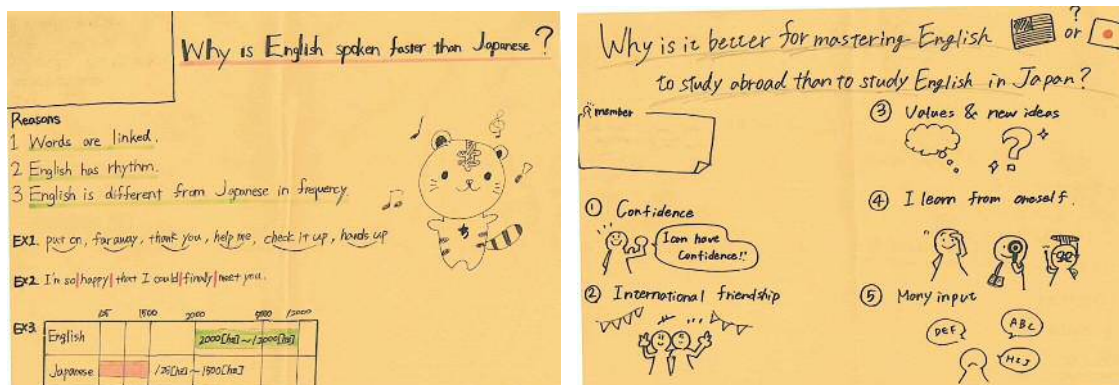


図3. 生徒が作成したポスターの例

2.2.2 試験結果

表5と図4に、2017、2018年度のTOEIC® IP Testの試験結果についてまとめる。990点満点のテストで、平均が280点前後であることから分かるように、本授業における生徒の習熟度からすると、やはり難易度の高い試験であったことが伺える。一方で、前年度の反省からリスニングのPart 1（写真描写）やPar 2（応答問題）については生徒が最も対応しやすいPartであると考え、2018年度は毎授業の最初にアプリ教材を用いて重点的にリスニング対策を行ったため、その効果が（もちろん統計的には誤差である可能性はあるが）多少なりとも垣間見えた点の一つの成果である。リスニングのPart 1, 2およびリーディングのPart 5（文法穴埋め）に対応できる基礎力育成に重点を置くことが、本受講生の学習への動機付けを高めることに繋がり得る。

表5. TOEIC® IP Testの結果の記述統計

	2017年度 (N=17)			2018年度 (N=26)		
	L	R	合計	L	R	合計
平均	166.5	105.3	271.8	175.4	108.7	284.0
標準偏差	41.0	25.6	59.8	43.3	28.7	61.1
最高点	255	140	385	260	195	445
最低点	85	60	145	100	60	185
中央値	165	95	265	175	100	277.5

注) L = listening, R = reading, TOEICの満点 (L, Rの合計点) は990点

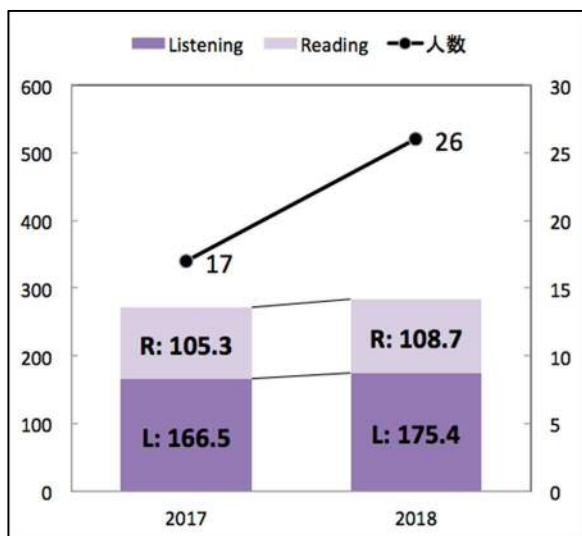


図 4. TOEIC® IP Test の結果と受験者数の変化

3. 課題

英語科における高大接続授業の課題点を、以下の3点にまとめる。

(1) 日程や習熟度などの「ずれ」

これまで述べてきたように、大学と高校には様々な「ずれ」が存在する。部活や行事に伴う授業日程のギャップはもちろん、授業者にとって最も苦しいのは大学の授業が求める英語力と本授業の受講生が有する英語力の乖離である。高校生は大学の授業を先取りして受講しているのであって、教科書や評価基準を大学基準に合わせることは一見合理的に見えるが、同授業を受講する大学2年生以上と同様の授業を展開しては、高校生の学習意欲を削ぐことになり、本授業の効果は期待できない。資格試験対策という明確な目標を維持しつつも、目の前の高校生に合わせた段階的な指導を行うことが肝要である。この点については、2年間の授業で明確な答えを見つけるに至ってはならず、さらなる検討が必要だと考えている。

(2) 「大学らしい」授業の在り方

高大接続授業を2年間担当して思うことは、なぜ英語という科目が接続授業として選ばれ、授業をどのように展開すれば、本来の当該授業の意義を果たすことができるのだろうかということである。本授業の目的は、社会の変革に対応できる人材育成のために「学力の3要素」をバランス良く伸ばす一貫した指導を高校・大学にわたって実現するということであった。資格試験対策は目標としては明確であるが、それに加えて、学びを深めるための仕掛けや工夫がなければ、上記の目的は達成されない。そのため2018年度の筆者の授業では、例えば試験的に Exploratory Practice の実践を行うなどして、一定の成果を収めることができた。資格試験を題材として扱いながらも、生徒がもつ疑問や関

心を主体的に深める機会をもち、大学入学後も、あるいは生涯にわたって、自律的な学びを継続していけるような生徒を育ててこそ、本接続授業の意義が果たされるものと考えている。

(3) 受講生の「その後」を追う

中部大学と春日丘高校の高大接続授業も2年目が終わり、受講生合計43名が中部大学に入学することになった。春日丘高校からは、毎年多くの生徒が中部大学に入学しているが、その中でも本授業の受講生が入学後にどのような学びを継続し、進路を実現させていくのか、そしてこの接続事業を今後振り返った時に、受講生自身がどのような評価を下すのかを調査しなければならない。本年度、筆者の研究室には昨年度の受講生が何度か訪ねて来ることがあった。フォーマルな調査に加えて、こうしたカジュアルな形式でも、受講生のその後を見届け、事業自体の改善へと繋げていかなければならない。

4. 結語

本稿では、中部大学と春日丘高校のさらなる連携を目指すとともに、今後高大接続授業を行う（あるいは既に行っている）日本の英語教育関係者への情報共有として、初年度から2年間の英語科における高大接続授業の成果と課題についてまとめた。今後も「大学らしい」英語授業の在り方を模索しつつ、こうした事業を一過性のものとして終わらせることなく、継続的に具体的な改善へと繋げていく必要があると考えている。

参考文献

- Hanks, J. (2017). *Exploratory Practice in language teaching: Puzzling about principles and practices*. London: Palgrave Macmillan.
- 文部科学省. (2014). 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について—すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—参考資料」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/12/19/1354156_13.pdf
- リクルート進学総研. (2017). 「今、“現場の” 高大接続はどこまで進んでいるか？」『キャリアガイダンス 418』リクルート.
- Tajino, A. (Ed.). (2018). *A new approach to English pedagogical grammar: The order of meanings*. Oxford: Routledge.